
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 閃光の黄猿 ~

ロベル・アクベル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 閃光の黄猿

【Nコード】

N4366Q

【作者名】

ロベル・アクベル

【あらすじ】

海軍本部最高戦力、三大将。

その一角を成す大将黄猿が、何と異世界ミッドチルダへ！！

これは、光と交わる若き局員達との物語。

ブローグく閃光が行く

広大な海の平和を守護する海軍。

その正義の中枢、海軍本部。

三日月型の湾頭を持つ島、マリンフォードにそびえ立つ海軍本部では、今日もまた幾人もの海兵が出動、帰還していた。

その湾内に浮かぶ軍艦に、乗組員が乗艦するのを見ている一人の男。

「今日も忙しいねエ」

島の中央に建てられた巨大な要塞、その上層部の一室の窓から見下ろしているのは、黄色のスーツを着こなす中年男性だった。

薄色のサングラスの奥に光る眼差しで、軍艦に乗り込む海兵を眺めている。

ふと、彼は手にしたお茶を啜りながら、振り返った。

「オジキ、こつちも任務だよ」

広々とした部屋の入り口、そう彼の後ろから話し掛けてきたのは、赤い前掛けのような服を着た青年である。

髪型は坊ちゃん刈りで、どことなく幼く感じる部分もあるが、その体躯と鋭い視線は間違いなく鍛え抜かれた戦士のもだった。

更に彼が楽々と背負った無骨な鉞まさかりを見ると、彼がかなりの実力者である事が伺える。

「全く……こつちも仕事かアゝい？」

黄色スーツの男は文句を垂れるが、青年が睨むと渋々とコート掛けに掛けた真っ白なコートを羽織り、青年と共に部屋を後にした。

そのコートの背には“正義”の二文字が踊り、黄色スーツの男は青年から任務の内容を歩きながら聞く。

廊下ですれ違う海兵は全員が道を空け、二人に敬礼をするも、話し中の二人が答礼出来ない事を知ってか、尊敬の視線を男に送りつつ、去っていった。

「……と言う事らしいぜ、黄猿のオジキ」

「おおゝ了解、戦桃丸君」

二人はそう言葉を交わすと、先程黄色スーツの男が眺めていた港へ、足早に向かつて行った。

これは海軍本部大将黄猿ことボルサリーノ失踪の、約半日前の会話である。

ブローグ〜閃光が行く〜（後書き）

次回〜異世界〜

「リリカル・マジカル、頑張るよォ〜！」

第一話　異世界へ

海軍本部大将黄猿が目を開けると、そこは森林だった。

小鳥のさえずりが聞こえ、日光も燦々と輝く風景だ。

さしもの黄猿も、外見ではそれらを冷静に眺めるが、頭は若干混乱している。

確か、自分は船の上にいなかったか？

確か、海賊を捕獲し、海軍本部へ帰還途中ではなかったか？

そして、確か今は真夜中ではなかったか？

そんな事が幾つも頭に浮かび、黄猿は現実逃避も含めて空を見上げたが、青空に見えるそれを視界に入れ、更に絶句した。

月である。

しかし、黄猿の知る月ではなかった。

まず、大きさが違う。

直径からして、自分の知る月の二倍近い大きさだ。

大体、あれは月と言うよりも惑星である。

それが幾つもの真昼の空に浮かぶのは、あの新世界でも見られない光景だろう。

「……どこだろうねエ、ここは」

半ば呆然とし、左腕に巻いた電伝虫を見つめた。

ちなみに、これは盗聴用であるので話し掛けても無駄なのだが、今の黄猿にはそんな気も起きないのだ。

そもそも自分の部下……戦桃丸の持ってきた任務は、天竜人が気に入らないと言った海賊船団の殲滅だった。

正直、天竜人にデカイ顔をされるのは癪に障るだけなのだが、悲しきかな宮仕えである。

文句を言う訳にもいかず、その海賊達を全員とっ捕まえて、帰還した後には憂さ晴らしとして仲間と酒を飲みに行きたかったのだが……。

帰還途中の軍艦の甲板でボーッと月夜を見上げていたら、その夜の闇よりも深い黒い穴が現れて……吸い込まれたと思ったら、ここにいたのだった。

「はあ、わっしも運が無いのかねエ」

嘆くように、サングラスを押さえる。

が、すぐにその奥にある目を鋭くさせ、辺りを見回した。

すると森の木々の間から、幾つもの機械のような物体が現れる。

その青っぽい体の全体は楕円形をしており、中心には黄色い目玉があった。

しかも低空ながら、空中に浮きながら移動している。

余談だが、世界政府最高の科学者であるベガパンクのボディーガードを任されている戦桃丸を部下に持つ黄猿は、何度か彼の実験室にも行った事があるので、似たような機械と会った事も戦わされた事もあるのだった。

なのでそこまでは驚く事は無かったのだが、機械の一体が中心にある目玉を発光させ、自分と似たようなレーザーを撃つたのには驚く。

無論、すぐに体を軽く逸らして回避したが。

「狙いは、わっしなんだねエ」

周りの丸っぽい機械達の目玉が一斉に光つたのを見て、不愉快そうに口元を歪めつつ、黄猿は指先を発光させた。

数多にある次元世界、それを統括する組織……時空管理局。

その第一管理世界ミッドチルダ。

中央区画・湾岸地区……そこに隊を構える機動六課に出動命令が発せられたのは、黄猿がこの世界に現れて数分後の事だった。

中型の次元震……いわば、時空の歪みによる地震……が発生したので、その調査が任務の内容である。

本来なら別の調査部隊が出るのだが、どうやらミッドチルダを管轄する地上本部は、この機動六課に当たらせたいらしい。

その部隊長室にて、三人の女性が話していた。

「ここから数十キロ先の森林地区に、次元震の反応があったようや」
独特の訛りが入った口調で、画面に映し出された地図を指差すのは、機動六課部隊長の八神はやてである。

短めの茶髪を軽く撫で、部隊長デスクの前に並ぶ二人に視線を移した。

「この調査に向かえばよろしいのですね」

ピンクの髪をポニーテールに結った美女……シグナムがその地図を見つめ、言う。

少し固めの言葉遣いだが、誰も気にしていない事から、これが彼女の素なのだろう。

その隣にいた長い金髪の美少女……フェイト・テストロッサ・ハラオウンは苦笑しつつ、はやてに話し掛けた。

「それにしてもこの任務、完全に地上本部からの嫌がらせだよね？ わざわざ、ロストロギア専門の六課に依頼するなんて」

ロストロギア、それは様々な世界に存在する古代遺物であり、中には世界すら消し去る程の威力を持った代物であるのだ。

その確保や管理をするのが遺失物管理部対策部隊……つまりは、時空管理局における機動六課の役割なのである。

はつきり言えば、業務内容に次元震調査は入っていないのだった。

「まあ、しゃーないよ。

うちらは地上本部に嫌われとるしなあ」

はやても苦笑で返し、革張りの椅子にもたれかかる。

「ほいなら二人とも、万が一の事もあるかもしれへんし……油断だけはせえへんといてえな」

手を組み、部隊長のデスク越しに二人を見つめ、出撃の指示を出した。

「了解、ライトニング1：フェイト・テストロッサ・ハラオウンと」

「ライトニング2：シグナム、出撃致します！」

フェイトとシグナムははやてに敬礼をし、踵を返すと六課隊舎屋上にあるヘリポートへと向かい、既にエンジンを暖めていた輸送用ヘリに乗り込む。

「ヴァイス、すぐに出してくれ。

なるべく早く終わらせたい」

搭乗員の席に座るシグナムがコックピットで操縦桿を握る青年にそう言つと、ヴァイスと呼ばれた男性は「了解」と軽い返事をし、ヘリを浮上させた。

青空を滑るように進むヘリの中で、フェイトとシグナムはロングアイチ……後方の管制官から現場の情報を貰っている。

二人の目の前にはディスプレイが現れており、そこに映る短髪の活発そうな少女が報告した。

『辺りは森林地帯で、今の所はロストログリア反応も無いようです』

シグナムは宙に浮かぶディスプレイの少女に頷き、フェイトに向き直る。

「やれやれ、これは本当に散歩で終わるのではないか？」

「シグナム、油断しちゃダメだってはやてにも言われたでしょ？」

フェイトは珍しくだらけた事を言うシグナムに口元を緩めつつ、軽く注意をした。

と、シグナムが文句を垂れたからかどうかは知らないが、先程のディスプレイの少女が焦った表情と声を出し、再び二人に報告する。

間違いなく、良くない事が起きたのだ。

『え……ええッ！嘘、ガジェットの反応……例の調査ポイントからです！』

「え？でも、ロストログアの反応は無いんじゃないの？」

ガジェット……この頃、時空管理局がよく遭遇する機械兵器。

カプセル型のボディを持ち、ロストログアに群がるロボットで、管理局が保有する戦力である魔導師に対して、致命的な能力を持つ危険な機体なのだ。

ちなみにフェイトとシグナムは、管理局でもかなり優秀な魔導師である。

『そうなんですけど……ええと、取り敢えず、映像をそちらに送りますね！』

どうやら、画面の向こうの少女にも理解できない事態が起きているらしく、彼女は今出ているディスプレイの隣に新たなディスプレイを出し、そこに映像を流した。

そこに映された映像を見つめると、フェイトとシグナムも呆気にと

られる。

『その程度でわっしにダメージを与えるなんて、無理な話だよー』
間延びした口調の黄色い服を着た中年男性が、金属の装甲を持つガジェットを、足蹴りで紙の様に切断していたからだ。

「ふええッ！

何で、民間人……なのかな？」

身のこなしを見る限り、この男性は戦闘のプロフェッショナルのようなのだが、どうやら彼は魔導師ではないらしい。

フェイトはディスプレイに表示されるデータとも見比べたが、男性が魔力を使っている形跡が見当たらないのだ。

つまり、彼は魔法も使わずにそれなりの硬度を持つ金属製のガジェットを、素手や単なるキックで破壊している事になる。

「しかし、デカいな」

面白そうに映像を見ていたシグナムの呟きに、一瞬フェイトは彼女が何を言っているのか分からなかったが、彼がガジェットを持ち上げた映像を見て、なる程と思った。

ガジェットの全長は、約一メートル三十センチだ。

それを男性は軽々とだけでなく、自分の目の高さまで持ち上げる。

更に両手でガジェットを両サイドから挟み、まるでアルミ缶のよう

に潰してしまった。

つまり映像の男性は、少なくとも身の丈二メートル半以上で、金属を押し潰せる筋力を持った巨人という事。

時々バラエティー番組に次元一背の高い男性というのが出てくるが、彼女らの記憶にある男性よりも画面の中年男性の身長は高く、尚且つ足腰がしっかりとしていた。

「と、とにかく。」

この人から事情を聴いてみようか」

フェイトは隣に座るシグナムが何を考えているのかが分かるが、まずは任務だ。

そもそも男性が誰なのかも分からないので、事情聴取はしないといけない。

一方、シグナムは「うむ」と映像の向こうで戦う男性を熱視線で見つめつつ、返事をした。

フェイトは若干不安を感じつつ、ヴァイスにヘリのハッチを開けてもらい、空へと飛び出る。

その後少し遅れて、シグナムも飛び出た。

ヴァイスは二色の光が愛機を追い越していくのを眺めつつ、操縦桿を握ってヘリの速度を落とす。

彼女らから連絡があるまで、彼は待機なのだった。

計器類を見つめ、整備士がしっかり仕事をしているのを確認すると、
ヴァイスはロングアーチに連絡し、自分にも映像を見せるように要
求する。

その通信相手とは気心が知れた間柄らしく、軽く良い返事をしてく
れた。

「それにしても、中々ダンディな旦那だな」

暇なので回してもらった映像を見て、ヴァイスはそう呟く。

その映像では、黄色スーツの男……黄猿が、最後のガジェットを蹴
り飛ばす映像が流れていた。

第一話へ異世界へへ（後書き）

次回へ邂逅へ

第二話　邂逅

自分に襲いかかってきた丸い機械人形、その最後の一体を蹴り飛ばした後、黄猿はやれやれといった感じに首を振り、ガラクタとなった機械人形を集めた山に座り込んだ。

弱いねえ、黄猿の感想はそれだけだった。

最初は自身の能力を使うつもりだったが、その動作が規則的で、わざわざ能力を使わなくても覇気を用いた体術のみで対応可能な相手だと知り、結局最後まで体術で壊してしまう事となったのだ。

まだ、弱い海賊でももう少し歯ごたえがあった気がする。

「全く……また、ベガパンクが何かやらかしたのかねエ？」

彼に自分の能力を調査された経験を持つ黄猿は、またベガパンクになにかされたのだと表面的には思っていたが、内面ではいくら彼でもこれは無理だ、と思っていた。

だからと言って、今の状況では正直やることも無く、やるせなく機械の残骸の山から澄み渡る青空を見上げていると、また何か近づいてくるのを感じる。

ピクリと眉を動かし、視線だけをそちらへ向けた。

先程のガラクタを送りつけた奴だろうかと思い、それらを見た黄猿

は目を見開く。

「私達は時空管理局です。

こちらには敵意はありません。

ただ、事情をお聞かせくれませんか？」

気配の先は上空五メートル程なのだが……そこに、女性が二人浮いていた。

両方とも年の頃は、上に見ても二十代前半。

下にみたら十代後半位だろうか。

スタイルや顔立ちも美しく、美人や美少女の部類に入るような女性達である。

二人のうち、金髪の女性は黒っぽい服に白いマント、手には黒い斧槍を携えていた。

その隣ではピンク髪の女性が腰に差した刀を掴んでいるが、随分と太もが見える変わった服を着ている。

しかし、二人とも浮いていた。

悪魔の実の能力だろうか？

黄猿は値踏みするような視線を向けつつ、座ったまま背中隠した指を軽く発光させ、いつでもレーザーが撃てるように意識した。

それを気取られないように注意しつつ、黄猿は顔にお得意ののん気な笑みを浮かべる。

「おお、時空管理局ねエ……。聞いたことの無い組織だねエ」

これは本当の話。

そこそこ人生を生きてきたと思う黄猿も、“時空管理局”という組織や島や民族等を聞いたことが無い。

それを聞いた二人は互いに目を合わせたようだが、何かの合図だろうか？

二人して、ゆっくりと地面に降り立った。

黄猿はその動作をじっくりと見つめ、笑みを絶やさないようにする。視線や位置取りなどを見た感じ、二人ともなかなかの戦士のようなようだ。

「あの、時空管理局をご存知ないのですか？」

金髪女性が再度確認するような口調で尋ねてきたので、黄猿は頷く事で答えた。

「で、君らがさっきのガラクタを送ってきたのかなア？」

黄猿は面倒なので直球で本題を尋ねるが、金髪の女性は首をブンブンと横に振って否定する。

「ち、違います！

私達は、あなたを保護しに来たんです！」

それに合わせるかのように、ずっと黙っていたピンク髪の女性が口を開いた。

「あなたは、異世界から来た遭難者……つまりは次元漂流者の可能性があります。

ですから、我々に付いて来ていただけませんか？」

異世界、黄猿の顔から笑みが消える。

それを見た女性達はビクツと身構えるが、黄猿は隠して光らせていた指の光を解き、彼女らを視界にいったままサングラスを掛け直した。

しばらくの間、何とも重たい空気が両者の間を駆け抜ける。

そして何分経っただろうか、黄猿はふむと呟くと、再び顔に愛嬌を戻して言った。

「……次元漂流者ねエ。

その前に、その時空管理局って組織についても教えてくれるかねエ？」

愛嬌は戻したが、一切油断せずに尋ねる。

その雰囲気を相手も察したのか、互いに緊張を解かずに話し合った。話し合ったと言っても、女性達が話す内容に黄猿が時折「おおー」などと相づちをする位だが、途中で衣服の変わる魔法なども見せてもらうなどして、少なくともここが異世界だという事は信じざるを

得ないという結論に至る。

まあ、そもそも見える天体がおかしい時点で、とんでもない場所に飛ばされたとは思ったのだが……異世界で魔法の世界とは……。

久々に己の想像力を超える出来事に遭遇し、最早溜め息を吐く事しか出来なかった。

「あ、あの、そんなに気を落とさなくても大丈夫ですよ？
あなたのような方を元の世界にお返しするのも、我々の仕事ですから」

金髪の女性が慰めるように話し掛けてきてくれたので、返事をしようと思ったのだが、そういえば互いに名前を知らない事に気付く。

「おお、そういやア、まだ君らの名前を聞いてなかったねエ」

黄猿はそう言つと機械人形の山から立ち上がり、二人の前に立った。

「わつしは海軍本部大将黄猿。

……あア、本名はボルサリーノだよ」

一応、海軍式の敬礼付きで自己紹介したのだが、返ってきたのは答礼ではなく……。

「た、大将閣下ですか！？」

美女二人分の驚きの声であった。

その次に慌てた様に敬礼をし、官姓名を名乗る。

「失礼しました、大将閣下。」

私は時空管理局執務官、機動六課所属のライティング小隊隊長：フ
ェイト・テストロッサ・ハラウンです」

金髪の女性が堅苦しく言うと、ピンク髪の女性も堅苦しい口調で名
乗った。

「同じく、ライティング小隊副隊長のシグナム二等陸尉です」

フェイトとシグナム……二人はそういう名前らしい。

階級によく分からない名称が出て来たが、それは後々尋ねる事にし
て、取り敢えずは彼女らの言う“機動六課”なる部署にて事情聴取
やら何やらを行うらしいので、二人に従う事にした。

シグナムが“へりこぶたー”という飛行機械を呼ぶため、彼女の目
の前に現れた画面に話し掛けている間、黄猿は出来る範囲でフエイ
トと情報交換を始める。

その際にシグナムの前に現れた画面が“空間でいすぶれい”という
代物や、最初に二人と会った時に着ていた“ばりあじゃけつ”や
“でばいす”などの話を聞き、黄猿は世界政府や海軍の話を機密に
触れない程度に教えていた。

「……なる程、様々な国々が加盟した統合組織“世界政府”ですか。
私達時空管理局と、少し近しい組織みたいですね」

が、どの組織にも暗部や腐敗はある。

一つの世界を支配しているに過ぎない世界政府とて、そういったモノがありまくるのだから、数多の世界を管轄する時空管理局は更に闇が大きいだろうねエと思いつつ、無邪気に微笑むフェイトに愛想笑いで返した黄猿。

すると空気を切るような独特な音を出しながら、空から四角い箱が飛んで来るのが見えた。

あれが“へりこぶたー”か。

黄猿はそう思いつつ、異世界生活での一步を踏み出したのである。

第二話、邂逅、（後書き）

第三話、機動六課、

第三話　機動六課

機械人形……ガジェットというらしい……と出会った森林でヘリコプターに乗せてもらい、機動六課までの道程約三十分。

そして出発から五分後、黄猿の視界は真横になっていた。

目の前には、このヘリコプターの搭乗区画に備え付けられた座席に座るフェイトとシグナムがおり、黄猿は彼女らと熱心に情報交換を行っている。

搭乗の際、シグナムは六課の部隊長に黄猿の事や調査結果を連絡したようで、向こうへ着いたら身体検査とより詳しい聴取を行うそうだ。

まあ、それはよいのだが……。

「……ヘリコプターって、何でこんなに狭いんだろうねエ」

会話の最中、つつい黄猿はばやいた。

現在、黄猿の体勢は体を搭乗区画の床に寝そべらせており、頭は手で支えている。

所謂、休日に家でゴロゴロするオッサンの体勢であった。

別に黄猿はオッサンであるのだが、流石に初対面に近い相手の目の

前でこんな無礼な事はしない。

なら、何故そのような事をするのかと言えば……。

機動六課の寄越してくれたヘリコプター。

人に入るスペースは、大体は高さが二メートル半程。

広さは中々だが、身長三メートル半と逞しい肉体を持つ黄猿にとって、これは狭い。

中年真つ盛りの黄猿の腰では、この揺れる機体の中での中腰はキツすぎるので、仕方無くヘリコプター内で寝転がっているのだった。

ミッドチルダの平均身長を遥かに超える人の為には設計されていないヘリコプターに文句は言えないので、シグナムとフェイトは苦笑するばかりだ。

ちなみに黄猿の能力を使えばヘリよりも速く六課に着くのだが、何となく悪魔の実の能力を使う事は控えようと考えたのである。

それは機動六課や時空管理局の共通理念、“ロストロギアの確保”によるものだった。

海に嫌われる事を代償とし、様々な力を与える悪魔の実……考えてみれば、これもロストロギアに入るのではないか？

そして、それを食べた自分はどうか？

そんな事を考えると、悪魔の実の話は暫く隠しておく方が無難だという結論に至ったので、その話は伏せておく事にしたのだ。

『まあ、その身体検査で分かるかもしれないけどねエ』

黄猿はそう思いつつ、美女二人のスカートの奥地に眠る樂園に、鋭い視線を移すのだった。

その頃、機動六課部隊長室。

強化ガラス張りの執務室に入る陽光を受けながら、部屋の主である部隊長：八神はやては盛大に頭を抱え込んでいる。

「ガジェットを素手で破壊する、海軍大将……」

先程、家族である部下からの報告によれば、そんな次元漂流者を保護したとの事だ。

ふむ、それならば次元震の説明もつくのだが……。

「素手で破壊も有り得ないけど、問題は相手が一軍の大將って事だよね？」

調査任務の指令を出した際、シグナムとフェイトのいた位置に栗毛の美女が立っていた。

はやてや二人のとは違う白を基調とした制服に身を包み、目の前でうんっん唸る上司を見つめている女性は、高町なのは一等空尉である。

ちなみに、はやての階級は二等陸佐だ。

彼女はサイドアップの髪型にした頭を傾げ、困った様に言葉を続けた。

「まさか、地上本部のレジアス中将よりも上の人なんてね」

今の管理局地上本部を率いているのは防衛長官の肩書きを持つレジアス・ゲイズ中将なのだが、シグナムとフェイトの二人が保護したボルサリーノと名乗る中年男性は大将、つまりはその上官に値する。ちなみに時空管理局は異世界であれども、その世界の階級は尊重する立場にあるので、その男性をはやて達は上官として接しねばならないのだった。

シグナムからの報告では、ボルサリーノ大将は別段階級を気にしない人らしいのだが、それでも異世界の大將閣下を無碍には扱えないのである。

「兎に角、応接室で色々お話を聴かせてもらうしかないやろ」

後々の報告書をどうしようかと思いつつ、はやてはなのはに同席を頼み、その大将黄猿殿が到着する前に応接室へと向かうのだった。

そして二人が応接室に着き、お茶や茶菓子の支度を始めた頃、六課屋上のヘリポートに黄猿を乗せたヘリが着陸する。

機体が降りると幾人もの整備士が寄ってきて、ヘリの調整やメンテナンスを始めた。

その機体後方にあるハッチが開かれると、そこから黄色のスーツに身を包んだ巨人……黄猿が頭をぶつけないよう、ゆっくりと現れる。

下げていた頭を上げると、黄猿は目を見開いた。

機動六課……前方に海が広がっており、懐かしい磯の香りが鼻腔をくすぐる。

その海の奥には、巨大な塔のような建物がいくつも見えた。

あれが“びるでいんぐ”というやつなのだろうか？

未来国“バルジモア”や海軍でも見た事無いような物ばかりで、好奇心旺盛な黄猿は目を奪われてばかりである。

「あの……お気持ちは分かりますが、部隊長がお待ちですので……」

フェイトは整備士や六課周りの風景に興味津々の黄猿に困った様な表情を向けつつ、内心は黄猿を可愛い人だなと思っていた。

ちなみに黄猿とフェイトやシグナムでは身長差が二倍以上あり、互いに見下ろしたり見上げたりしなければならぬので、なかなか円滑なコミュニケーションが取れない。

まあ、さっきは寝転がっていたお蔭で、よいモノが見れたのだが……、しかしシグナムは兎も角、フェイトは白よりも黒が似合うと思うねエと考えつつ、彼女らの誘導に従うのであった。

「うーん、その次元漂流者ってのは、そんなに珍しいのかねエ？」

六課内部の廊下を歩きながら、自身に向けられる好奇の眼差しに若干不愉快になる黄猿。

頭は天井スレスレを通っている。

「う、申し訳ないですう」

そう言ったのは、黄猿の頭の真横を飛ぶ少女……リインフォース・ツヴァイ。

呼び名は“リイン”だそうだ。

小さな顔に申し訳なさそうな表情を浮かべて謝罪するリインを眺めつつ、魔法だか何だか知らないが、空飛ぶ体長数十センチの少女にも、慣れれば可愛いものだと思った。

彼女は機動六課部長：八神はやての補佐官の立場にいるようで、これから調査の報告をしなければならぬフェイト達に代わり、黄猿を迎えにきたらしい。

リインが最初ヘリポートに現れた時はビックリしたが、話せば子供みたいで、なかなか面白いものだった。

黄猿はリインに構わないよオと言いつつ、向けられる好奇の視線を探ってみる。

目だけそちらに動かすと、食堂らしき場所にて山のような量のラン

チを食べる青紫髪の少女やオレンジ髪の少女……まあ、その他諸々が自分を興味深そうに見つめていた。

ん、黄猿は唸る。

機動六課に来てから思ったのだが、隊員に随分と若者がいるのだ。

先程の青紫とオレンジ髪の少女は十代、彼女らと同じテーブルで昼食を摂っていた赤髪の少年とピンク髪の少女などは十代になっているのかさえ怪しい。

一体、どういう基準で局員にしているのだろうかと思いつつも羽織ったコートを翻し、食堂の連中に怒りの表情……黄猿からしてみたら可愛いくらいだが……を向けていたリインに続いて、スタスタと歩くのだった。

小さいリインと巨大な黄猿が去った後、食堂では黄猿に関する話題で盛り上がり始める。

「ティア！さっきの人見た！？
すっごいおっきかったね！」

きやあきやあと騒ぐ青紫髪の少女……スバル・ナカジマはランチを口に運びつつ、先程食堂前の廊下をリイン曹長と共に通って行った男性……黄猿の感想を話し出した。

「うつさいわね……でも、確かに身長も高かったし、体格もかなりよさそうだったけど……誰なのかしら？」

口に食べ物を入れつつ喋りまくるスバルを睨みながら、そう言ったのはティアナ・ランスターという少女である。
スバルの口振りからすると、愛称は“ティア”らしい。

「本局の幹部の方でしょうか？
コートに付いていた肩章も立派でしたし」

スバルの正面に座る赤髪の少年、エリオ・モンディアルは黄猿の服装を思い出しつつ、スバルに負けない量のランチを食していた。

「でも、ちよつと違うような……。
ほら、あの私服ですよ」

遠慮がちに言ったのは、キャロル・ルシエというピンク髪の少女である。

基本的に局員は制服の着用が義務づけられており、地上部隊は茶色、本局は青、執務官は黒、そして教導隊は白を基調とした制服なのだが、先程の男性は黄色……しかも制服ではなく、高級そうなスーツにサングラスを着用していた。

「確かに、あの恰好は局員っていうよりかはマフィアのボスって感じよね」

遠巻きで顔までにはよく分からなかったが、見た感じは四十か五十歳くらいの年齢だったなと思いつつ、若き局員達は教導官である高町

なのはに言われた通り、食後休止の後の自主トレの準備へと向かうのだった。

そしてリインの案内により応接室前に到着した黄猿は、自動的に開く扉を通り応接室に入ろうとしたのだが……。

「……つつかえたねエ」

身長三メートル超、鍛えた肉体の横幅も一メートルを優に越える黄猿は扉を抜けれず、腕の辺りで止まっている。

挟まった黄猿は数回バタバタしてみたが、ふと室内で自分を呆然と見つめている女性二人に視線を向け、口を開いた。

「……ゴメンよォ、助けてくれない？」

後ろからは小さいリインが黄猿の背中を押し、前では二人の女性……はやてとなのはが腕を引っ張る事で、何とか十分近く掛けて黄猿を引っ張り入れる事が出来た。

これから大事な話し合いをせねばならないのに、早速疲れる黄猿達。結局話し合いが始まったのは、報告を終えたフェイトとシグナムが

応接室に合流した時……約十五分後の事だったのである。

第三話　機動六課（後書き）

次回　猿とチビ狸の話し合い

第四話　猿とチビ狸の話し合い

「……で、今の話とさっきフェイト君達から聞いた話を統合するに」

黄猿は機動六課応接室の窓ガラスに映る、ミッドチルダの海を見つめていた。

帆船は無く、ただの四角い箱みたいな船が沢山見える。

帆を使わずに、駆動輪を使っているのかと思ったが、船体の横に大きな輪は無い。

それどころか、海面スレスレを浮いている船もあった。

全く、ますますどういう世界なんだか……。

そう思いながら、黄猿の耳は書類を手に話す少女達の方に傾けていた。

黄猿に対し、これからの処遇を説明しているはやて達は応接室備え付けの革張りのソファに腰掛けているが、その豪華な椅子は黄猿には少し小さかったので、現在彼は立ちながら管理局側の話を聞いている。

「わっしは次元世界の迷子で、原因は分からないが、この魔法の世界に迷い込んでしまった。」

そして、君らはそんな迷子を元の世界に送り返すのがお仕事。そう

だよねエ？」

「はい、そうです」

「で、どの位の期間で帰れるのかな？」

「それは……現在、該当世界を検索中です」

「ありがとう、八神中佐」

「二等陸佐です、大将閣下」

無味乾燥とも言えるような会話だが、黄猿とはやては別段気分を害しているワケではなかった。

表情が呑気な黄猿は誤解されがちだが、基本的に任務や仕事に関してはシビアな考えを持つ。

彼にしてみればこの場に合った口調を使っているだけだが、彼の目から見る限りにおいて、はやてやフェイト達はその雰囲気が少し苦手らしい。

軽く後ろを振り返ると、シグナム以外の女性はビクリと震えた。

彼女らは“大将”という肩書きに腰が引けているのか、それとも自分の顔が余程怖いのだろうか。

後者なら、少し落ち込むが。

黄猿は窓ガラスを鏡代わりに自分の顔を覗き込むが、そこに別段変わりはない。

そして余りに夢中に顔面観察をしていたせいか、フェイト執務官が話している保証関連の説明を聞き逃してしまった。

「ん？もう一度言ってくれるかなア？」

顎に生える無精ひげをさすりながら、分厚い書類を捲っていたフェイトに頼む。

その紙切れの厚みに辟易しつつ、黄猿は辞典並みの書類をフェイトの手から受け取った。

だが黄猿は表紙を見た途端、すぐにフェイトへその書類をポイ捨てるように返す。

長身の彼の手の高さからフェイトへ落とされたので、書類はドサツと音を出しながら、彼女の腕の中に着地した。

その衝撃で、フェイトは少しふらつく。

「そう言えば、わっしにはそこに書いてある文字が読めなかったねエ」

フラフラする彼女の頭を押さえ、そのまま持ち上げると、黄猿はフェイトをソファアへと戻した。

「失礼、執務官」

少し不機嫌そうになったフェイトに微笑を向けつつ、黄猿ははやてと向き合う。

と言つても、黄猿が座っている彼女を見下ろす形となっているが。

「八神二等陸佐、わっしは管理局の保護施設に入居すれば良いのかい？」

わっしの故郷が見つかるまで」

「はい、そういう事になりますね」

黄猿はこの八神はやてという少女の瞳の中に、思惑らしい事を一つだけ感じたのだが、わざとそれについて言及していない。

彼女も気づかれているのは知っているようだが、その瞳を止めようとはしなかった。

仕方無い、乗ってみようかねエ。

黄猿は室内を歩き回り、天井や壁等に視線を動かし続けた。

はやて達はその行動を見守るだけである。

「この部屋」

黄猿が唐突に口を開いた。

「この部屋、わっしにとつては少し狭いんだけどオ……もしかして、保護施設はもつと狭いのかい？」

「大体広さは半分位だと思いますが、天井は同じ位の高さですよ」

「狭いねエ、それは」

教導官である高町なのはの返答に、黄猿はわざとらしく肩をすくめる。

それなら、とはやてが書類を一枚黄猿に差し出した。

「狭いお部屋が嫌でしたら、この機動六課の空き部屋…… 勿論、士官用に広めに作っております…… にお入りいただいても結構ですよ？」

「ただし、特別局員として働かないか…… だよねエ？」

黄猿は目だけ、はやての手元の書類に向けた。

書いてある事は読めないが、恐らくは“特別局員申請用紙”か“民間協力者登録用紙”とでも書いてあるのだろう。

特別局員と民間協力者については、民間人や自分と同じ様な立場の人間が志願したり誘われるとフェイトとシグナムに聞いていたので知っていたのだ。

それを聞き、はやての差し出す書類を見たフェイト達は彼女に驚いたような視線を向けた。

多分だが、口から出す言葉で話さない技術“念話”を使っているのだろう。

これについても、仕入れた方法は同じだ。

彼女らの口は動いていないが、表情が微弱ながらも語っている。

どうやら、はやてを責めているか苦言を呈しているのだろう。

が、魔導師が手こずるガジェットという機械兵器とやらを、純粋な格闘のみで破壊するような人物をつまらない保護施設にぶち込むくらいなら、精々帰るまでこき使おうという魂胆か……親切心によるものか、それとも両方が。

面白い小娘だよ、八神はやてエ。

「わっしは構わないよ、はやて二佐。

君が許可してくれるなら、退屈な保護施設にいるより、こっちの方が面白そうだよ」

「なッ……大将閣下、しかし」

「わっしが“いいよ”と言ってるんだから、“しかし”はないでしょう？高町一尉。

それと、一々“閣下”や“大将”を付けられるのは堅苦しくてかわないよ」。

呼び捨ては困るけど、君らとわっしの関係を考えれば、せめて“さん”付けにしてくれるかな？公式の場を抜きにしてねエ」

と黄猿が言つと、はやての強張っていた肩が少しだけ和らいだ。

「わかりました。

それでは、黄猿さんかボルサリーノさんで」

「いいよ。

わっしは君らを大概“君”付けで呼ぶけど」

「それで構いません。
では、こちらの書類を……」

と、黄猿に手続きの書類を渡そうとしたが、文字が分からない事を思い出したらしく、はやては書類を黄猿に向けたまま音読し始めた。それを黄猿は軽く頷きながら、壁に背をもたれて聞いていた。

はやてが嘘っぱちを言っているか言っていないかは、フェイトなのはを見ればすぐに分かる。

二人とも、優しくて真っ直ぐだから、何かあればすぐに顔にはやてへの非難の表情が出る。

犯罪者相手ならともかくとして、可哀想な次元の迷子には気を抜いているのだろうか。

と、気になるワードがはやての口から飛び出て来た。

黄猿は彼女の音読を止めた。

「……テストするのオ？」

どうやら、民間協力者になるにはテストとやらを受けねばならない。困った。

元々、黄猿にそこまで学は無い。

学が無いから海軍に入ったワケではないのだが、勉強は基本的に好

きではなかった。

「……やっぱり、保護施設に入ろっかなア？」

前向きから急旋回で後ろ向きになった黄猿に、はやて達はアタフタし始める。

「あ、あの……テストはそんなに難しいものではありませんし、常識程度の知識があれば大丈夫ですよ」

「文字も後々教えていきますから、そんなに落ち込まないで！」

部屋の隅に座り込んだ黄猿に、なのはとフェイトは励ましの言葉を掛けまくるが、座り込んだ黄猿が立っている彼女らよりも高いのは流石である。

「それに、テストは紙のテストだけではないですよ」

そう言ったのは、今まで余り発言をしなかったシグナムだった。

何となく、その表情は獲物を目の前にした肉食獣に似ていたが、黄猿は顔を上げて彼女を見た。

「実技……つまりは、戦闘技術に関するテストも行われます」

はやて達はシグナムの言いたい事が分かるらしいが、黄猿はイマイチ分からない。

それでは……と、シグナムは黄猿に言い放った。

「ですからそのテスト、この私が相手をしたいのですが」

こうして、黄猿が六課入隊するためのテスト。

烈火の騎士との模擬戦が始まるのであった。

第四話ゝ猿とチビ狸の話し合いゝ（後書き）

次回ゝ烈火と悪魔の光ゝ

第五話　烈火と悪魔の光

黄猿はシグナムとなのはに先導され、テストの為に屋外の訓練場へとやって来た。

壊れた建物が建ち並ぶ光景だが、これは人工的に造った映像らしい。ここまでくると、自分の世界との技術力の落差がとんでもないものだと思うが、もう驚く事を諦める事にした。しかし、肩をすくめる事は忘れない。

「全く、これが映像なのかねエ？」

手身近のビルの壁面に触れたが、ザラザラとした手触りが映像だとはとても思えなかった。

「にやはは、私も初めてこういったのを見た時には驚きましたよ」

高町なのはも話に聞くと、ミッドチルダ以外の異世界出身らしい。

八神はやてもなのはと同じ出身だそうだ。

そして、少し歩くと四人の少年少女達の姿が見えた。

動きやすい服装を見ると、訓練中の隊員だろうか……と思ったら、食堂で自分をマジマジと見つめていた子供達だった。

なのはの話だと彼女らは訓練生ではなく、前線メンバー……つまりは戦闘要員だそうだ。

その子供達も黄猿を見た途端、びっくりしたような顔になる。

「え……えと、なのはさん？

そちらの方は？」

オレンジ髪の少女が、オズオズとなのはに尋ねた。

黄猿の見立てだと四人の少年少女達の中では、このオレンジ髪の少女がリーダー格らしい。

他の子らはオドオドして、黄猿を見つめているだけだったからだ。

それにしても隊長が二十歳前後ならば、この子らは一体幾つなんだろうか。

オレンジと青髪の少女は、十代前半位だろう。

赤髪の少年とピンク髪の少女は十代に至っているかも疑問だが、管理局の雇用問題については兎も角として、まずは挨拶だ。

そもそも海軍も少年を雇ったりしている。

ただし、最初は雑用しかさせてもらえないが。

「どうも、わっしは海軍本部大将黄猿だよー」

“大将”。その階級がこの子らの脳髓に浸透するまで、約十秒かか

った。

「たッ、大将閣下!？」

これは失礼いたしました!！」

すぐにバツと敬礼を取るが、やはりどこことなく若さがにじみ出ている。

が、そんな事は顔に出さずに、黄猿は呑気な表情を顔に浮かべた。

「おオ、そんなに堅苦しくなくていいよオ。」

これから君らと同じ所で暮らす事になるかもしれないしねエ」

「えッ?それはどういう……」

と、ここでののはの説明が入った。

黄猿の事、今の状況、そして軽く自己紹介も行った。

「次元漂流者なんですか……」

「そうだよオ、参っちゃうよねエ」

青髪のボーイッシュな少女……スバル・ナカジマに同情じみた視線を向けられると、黄猿は内心やるせなく思いながらも、呑気な表情は忘れずに答えた。

先程のオレンジ髪の少女……ティアナ・ランスターも似たような視線を向けている。

明るい赤髪の少年……エリオ・モンディアルとピンク髪の内気そうな少女……キャロ・ル・ルシエは黄猿の身長に驚いているのか、彼をぼーっと見上げていた。

キャロの肩には白い鳥みたいなトカゲが止まっていたが、後々話を聞くと、そのトカゲはフリードリヒ……通称フリードという名のドラゴンだったらしい。

ドラゴンも黄猿の世界でも殆どいないが、全くいないというわけではないので、そう驚く事も無かった。

「で、黄猿さんが民間協力者として働いてもらうために、一応の規則としてシグナム副隊長と模擬戦をしてもらうんだよ」

「えッ……」

シグナムと戦うと聞いたフォワードの子らは、少し顔を青くする。

「な、なのはさん？」

シグナム副隊長と戦うなんて……少し無理があるんじゃない」

心配そうな顔のスバルが黄猿とシグナムを見比べながら、なのはへ進言した。

黄猿はシグナムへと視線を移した。

最初会った時からかなりの実力者だと感じていたが、スバル達の顔色を見ると、シグナムは余程の使い手のようだ。

面白いねエ……。

サングラスの奥に光る黄猿の垂れ目が、シグナムを射抜く。

と、シグナムもその視線を読み取ったようで、似たような眼差しで黄猿を見返した。

何となくだが、彼女は黄猿と同じく海軍本部大將である赤犬ことサカズキと雰囲気似ている気がする。

この威圧感というか、戦いに賭ける何かのような物が酷似していた。

「え……えと？」

端から見ると、黄猿とシグナムが睨み合っているようにしか見えなかったので、キャラがアタフタしている。

二人の視線がぶつかり合い、火花が散っているように見えたのだ。

「じゃ、始めよつかア？」

「ええ……やりましょうか」

ニヤニヤ笑う二人に、なのはでさえビビった。

というか、ニヤニヤする黄猿は本当に顔が怖い。

黄猿とシグナムは立体映像の廃ビルが建ち並ぶ訓練場の中央付近で、互いに十メートル程間隔を取って向かい合っていた。

潮風が二人の間を通り抜け、コートとポニーテールがなびいた。

シグナムはバリアジャケットを装着しており、手には剣型デバイス“レヴァンティン”が握られている。

一方、黄猿はバリアジャケット等装着出来るわけもなく、完全な丸腰であった。

しかし、シグナムの額からは一筋の汗が流れる。

『ふふ……凄まじい気迫だ。』

これで相手も魔法が使えたら、かなりの強敵となっただろうな』

テストの前に行った身体検査の末、黄猿には魔法の源であるリンカーコアなる器官が無い……まあ、当然かもしれないが……事が分かったのだ。

それと同時に身体から妙な反応が出たので、それについて少しはやてが尋ねたのだが、軽くはぐらかされてしまったのである。

なので、その反応が何かを見極めるのも、はやてから言い渡されたシグナムの任務であった。

「それでは、互いに準備はいいですか？」

遠くから二人を眺めていたなのは声が、空中に浮かぶ画面越しに届く。

その画面の奥には、心配そうに見つめるスバル達がいた。

「こっちはいいよ〜」

「こちらもいつでも構わないぞ」

やる気満々の黄猿とシグナムに苦笑しながら、なのはは声を張り上げた。

「それでは、模擬戦を開始します！」

開始の合図の瞬間、シグナムの目の前から黄猿が消えた。

土煙を引きながら、黄猿は一瞬でシグナムとの間合いを詰め、力を込めた人差し指を彼女へと突き出す。

最初、シグナムは何が起きたのか分からなかったが、本能的に迫り来る指先を避けた。

黄猿の高速で打ち出された指は、シグナムのバリアジャケットの肩部分に大穴を開ける。

シグナムはレヴァンティンを下段から上段に振り上げ、黄猿を引き離れた。

まるで空気を蹴るようにして、黄猿は後ろに跳び下がった。

「おオとツとオ〜！」

そんな間延びした口調とは違い、黄猿の攻撃は衝撃的なものであっ

た。

ただの指先の一発で、シグナムの魔力で練り上げられたバリアジャケットが簡単に貫かれたのだ。

シグナムはレヴァンティンを構え、黄猿の追撃に備える。

「ふふ、面白いですね。

後々、今の技について教えてもらえますか？」

黄猿は口角をにいと吊り上げ、答えた。

「勿論、構わないよオ」。

君がわつしに勝てたら、伝授してあげてもいいよオ」

「なら、今度はこちらが見せる番です！」

《シュランゲ・フォルム》

レヴァンティンから葉莢が飛び出し、その刀身が強靱な綱で繋がれた連結刃になった。

「シュランゲ・バイゼン！」

連結刃が地面を削り、鞭となった刃が黄猿へと迫る。

まるでその刃は意思があるように動き回り、喉笛を狙う蛇の姿が黄猿の脳裏にイメージされた。

黄猿は脚を振り上げ、彼の胴体を狙った刃をタイミング良く弾き返

す。

野性的な動体視力により金属の刃を生身の足で蹴り飛ばし、弾かれた刃の先端は隣のビルへと目標を変えた。

轟音と共に、コンクリートの建物が崩れ去る。

シグナムは驚いた顔をしたが、すぐに刃の向きを変える。

その反撃を予想出来なかったのか、黄猿はその連結刃をともに受けてしまった。

が、レヴァンティンの連結刃は、黄猿の身体を突き抜けてしまう。

更に相手を貫いた筈だが、シグナムの手には何の感触も無かった。

黄猿はしまったという表情を顔に浮かべ、再び空を蹴り、後ろに下がった。

『何故、何の感触も無いのだ……？』

シグナムは視線を手元に移したが、すぐに黄猿へ戻す。

黄猿は羽織ったコートを翻して空中に飛び上がっており、その長い足から青い衝撃波を伴った蹴りが放たれる。

シグナムは連結刃を剣に戻し、空気を斬る様な衝撃波を刃で逸らした。

「嵐脚 乱桜」
らんきやく みだれざくら

しかし、逸らした途端に次の衝撃波がシグナムに襲い掛かる。

どういわけか黄猿は空中に浮かんでおり、そこから先程の蹴りの衝撃波を何十発も放っていた。

シグナムは数発をレヴァンティンで受け、後は蹴りの軌道を読み、回避しながら黄猿へと飛び上がった。

勢いの増す嵐のような蹴りだが、シグナムはそれらを当たる寸前で見切る。

一旦レヴァンティンを鞘に戻すと、再び薬莢が飛び出した。

「これで決めさせてもらいます!!」

鞘からレヴァンティンを抜くと、その見事な刀身から鮮やかな炎が溢れ出る。

黄猿はほオ……と感心した様に呟くと、蹴りの足を止め、そのしなやかな脚を自分に向けられる炎の剣へと振り上げる。

「紫電一閃!!」

シグナムは炎を纏った刃を黄猿へとそのまま振り下ろす。全くもって、単純故に強力な一撃であった。

炎の斬撃と鋼鉄の気を纏った蹴りが打ち合わされると辺りに火花が散り、大気を震わす衝撃が、遠くにいたなのは達の頬を撫でる。

「な、生身でシグナム副隊長と互角にやりあうなんて……」

スバル達は体術のみで戦う黄猿に絶句した。

「リミッター付きとはいえ、確かにこれはスッゴイかもね」

なのはは、冷や汗を流しながら二人を見つめた。

その顔は両者、非常に満足そうな表情である。

「んゝ、これは効くねエ」

「ふふ……嘘を吐かないで下さいッ!!」

シグナムが力を込めるとレヴァンティンの炎が増し、その勢いに耐えれなくなった黄猿の脚は打ち負けた。

剣と蹴りの勝負は、ついには剣が何とか押し切る事で勝利となった。

シグナムの紫電一閃が直撃した黄猿は、その威力のまま真下のビルへと墜落していく。

黄猿の背中が屋上をぶち抜き、土煙を上げながら、ドンドンと階下へと落ちていった。

身長三メートル超えの男が貫いたビルは、バラバラと崩れていった。

「ハアハア……」

シグナムは呼吸を整えながら、レヴァンティンを構え直す。

あの一撃を与え、なおも彼女は油断をしていない。

しかしビルの土煙の中から出てきたのは、ピラピラと振られる白いハンカチであった。

キョトンとするシグナムに対し、黄猿は空いている片手で腰を押さえながら、砕けたビルが出した白い塵の中から立ち上がる。

「降参だよー」。

腰打っちゃったア……もうへろへろだよー」

黄猿は不満そうな顔をするシグナムにウィンクし、肺を思いつ切り膨らまして、なのはに向かって声を張り上げた。

「今の戦闘、どうだったアー!!!」

その大声は遥か遠くにいるなのは達の鼓膜に、ガンガンと響く。

なのははキンキンと鳴る耳を塞ぎながら、苦笑をしつつ黄猿の目の前にディスプレイを開いた。

『自分から降参する方は初めて見ましたが、戦力としては何ら問題無いと思います。』

つまりは、合格ですッ!」

仕返しとばかりに、なのははディスプレイ越しの黄猿に大声で報告する。

苦笑する中にも嬉しそうな表情を浮かべた黄猿は耳を押さえ、彼の隣に降り立ったシグナムを見下ろした。

その顔は不満一色であり、端正な顔をムスツと歪めている。

心地いい金属音を出しながらレヴァンティンを鞘に納め、シグナムは自分を見下ろす黄猿を見上げた。

「何故降参などを！」

まだ、あなたは戦えた筈でしょうにー！」

「おお、そんなに怒らないでエー。

わっしらがこれ以上本気でやったら、日暮れまで掛かっちゃうよオ？」

「むう……それはそうですが……」

シグナムはまだ不満そうだが、相手にすると余計に文句が口から溢れ出しそうなので、彼女を無視して、スタスタと黄猿はなのは達が観戦していた場所へと向かう。

「あ……お待ち下さい！」

まだ、お話は終わってません！」

シグナムはその後を、ツカツカと追いかけて行った。

啞然とするフォワード達を後ろに控えさせ、なのはほんの数分前に接戦を繰り広げた二人を迎えた。

「何故ですか！

あなたの力量ならば、まだまだ私と交わる事が出来たのでは！？」

「だ〜か〜らア〜！

この戦闘の目的は、わっしの戦力を見るだけでしょ？

なら、あれ以上はやる必要が無いと思っただって言ってるじゃないのオ」

黄猿とシグナムは言い争いに近い事をしているが、シグナムのような美女が男性と交わるとか言うのは少し卑猥なんじゃないかと思いつつ、なのははシグナムをなだめ始める。

「まあまあ、シグナムさん。

これから、いつでも訓練できるようになるんですから……」

「あれ？わっし、シグナム君の訓練相手に決定なのかい？」

何となく独断的に決められたが、それでシグナムが落ち着いたので、黄猿は黙る事にした。

シグナムが落ち着いた後、スバル達フォワード陣が目を輝かせながら黄猿へと寄ってきた。

「すっごくいい！黄猿さん！
魔力無しでシグナム副隊長とやり合うなんて、一体あの技は何ですか？」

特にスバルが年下のキャロとエリオよりも目を輝かせており、黄猿をワクワクと見上げていた。

そんな彼女を何となく可愛らしく思ったが、立場的に真面目をよそおって説明し始める。

「あれは、六式っていう武術……わっしの世界の技だねエ」

「六式……それは、一体どういったもので？」

シグナムもワクワクした表情で尋ねた。

そう言えば黄猿は先の戦闘で負けてしまったので、シグナムに六式を伝授しなければいけないという口約束を思い出したが、彼女が求めれば教える事にする。

教えた所で、使えるかどうかは疑問であるが。

「じゃあ、教えるねエ。

メモを取るなりして、後々わっしがまたはやて部隊長の前で喋る事の無いようにしてよオ」

なのははデバイスを使い、話の内容を記録し始める。

「六式はわっしの世界の戦闘技術。

その名前の通り、基本的な技は六つあるんだよオ。

最初にわっしが見せたのは、爆発的な脚力で瞬間移動する“剃”^{そる}」

そういうや否や、黄猿の姿が一瞬で掻き消え、次の瞬間にはスバルの背後に現れた。

「は、速い！」

スバルを含めた機動六課の魔導師達は目を見開いて、黄猿を振り返る。

その速さは魔法を一切使っていない代物には見えないものであった。

魔法で例えるなら“ソニック・ムーヴ”という、この場にいないフエイトと目の前で黄猿を見上げるエリオの得意な高速移動の魔法があるが、恐らくそれに比肩するであろう速度だ。

しかもそれを黄猿は何の手間をかけた様子もなく、易々と行った。

本来なら、これよりも遥かに速い……恐らく黄猿が考えるにこの中の誰よりも速く動けるのだが、それを話すつもりはまだなかった。

「で、これが“指銃”^{しがん}」

黄猿はサッサと終わらせようと、己の指に六式の一つである“鉄塊”^{てっかい}を掛けた。

これが無いと“指銃”を放った瞬間に、いかに黄猿の指であろうとも複雑骨折をしてしまうのだ。

感覚としては“武装色の覇気”に近い“鉄塊”により、黄猿の伸ば

された指は強靱な鋼鉄の棒切れと同義の硬度を得る。

それを黄猿は近くにあった建造物の残骸に打ち放った。

鋭い、空気を裂くような音と共に黄猿の指はコンクリートの塊に突き刺さる。

しかし、彼の指が折れているような気配は一切無く、むしろコンクリートの方に亀裂が入っていた。

黄猿がゆっくり指を抜くと、僅かな土煙を出しながら綺麗に指が通った跡が見える。

それを見た全員が驚嘆の声を上げる。

“指の銃”という名称に一切の偽り無く、その穴は管理局が禁止している質量兵器の一つである“銃器”の弾丸が壁にめり込んだ様子に酷似していた。

といっても新人であるスバル達、フォワード陣は兎も角として、十九歳ながら経歴十年のベテラン局員であるのは達も、御禁制である質量兵器等は殆ど見た事が無いのだが。

「ふええ……。すごいです」

キャロとフリードはまじまじと開いた穴を見つめた。

興味津々な彼女に黄猿は微笑み、小さなキャロと出来るだけ同じ視線に屈んだ。

「ちなみに、人間に撃つとこれと同じ穴が開くけど……試してみる

かアい？」

これは“指銃”を教える際の海軍式冗談なのだが、キャラは顔を真っ青にしながら首を横にブンブンと振りまくっていた。
ピンクの髪がバツバツと揺れている。

自分にロリコンの気は無いのだが、黄猿はその小動物みたいな行動を見て少しキャラを可愛く思った。

こんな新鮮な反応を示す人物なんて知り合いには殆ど……というか全くいないので、何となくもう少しいじめてみたいと思ったが、なのはシグナムは本気で黄猿がキャラの脳天に“指銃”をかますと思っただけ、反射的な速度でデバイスを構えたので早々に謝る。

「おお、冗談冗談。

いくらなんでも、海軍大將たるわっしが無防備な子供を殺したりなんかしないよオ」

ハンスアップをした黄猿を見て、なのは達も毒気を抜かれた様な顔になる。

つい本気になってしまったが、状況的に考えても黄猿がキャラを殺すなんてありえないので、互いに苦笑しながらデバイスを下した。

「え、あ、あはは。

そうですね、冗談ですよね？」

「その割には顔が本気みたいでしたが……」

これは海軍でも同じで、この冗談を言う時の黄猿の顔は薄ら笑って

いて本気にしか見えない…… 本人にしてみたら冗談っぽく笑っているらしいが、他人からはこう見える…… ので、大概の新人海兵はこの言葉で青くなるのだがキャラやその周り程顕著な行動はしなかったので、本人にビビられているという自覚は全く無かったのだ。

なので今回も何故デバイスを向けられたのか、サッパリ理解できない黄猿。

完全にビビってエリオの後ろに隠れたキャラを見て、子供に悪いことをしたなと反省しつつ、話を戻すことにした。

「ホントに冗談だからねエ、あんまし気にしなくてもいいよオ。
……で、次にシグナム君の攻撃をよ避けた技とそこから放った蹴りを説明するねエ」

黄猿は気を取り直して、二メートルばかり飛び上がると、その場で
「月歩^{げっぽう}」を使った。

バインバイン、と空気を足場にして何度か跳ねた。

一方生身の人間が空中で魔法を一切使わずに、尚且つ空気という触れないモノを足場に行っているのを見て、なのは達はまた絶句する。

「これは“月歩”といってねえ、中々便利な技なんだよオ」

黄猿は空中を跳びながら、見上げるなのは達に言った。

この技の欠点と言えばまず間違いなく、高度を保つためにはこうやって跳び続けられないといけないことだろう。

まあ用途的に跳び続ける事ではなく瞬間的な回避が主な使用方法なので、仕方ないと言えばそうかもしれないが、端から見るとバインバインと飛び跳ねる姿は間抜け以外の何ものでもないのだ。

しかしなのは達からしてみれば、多くの魔導師がぶち当たる飛行という壁を跳ぶという行為で魔法を一切用いずに行っている彼に驚いていたので、間抜けとは思えなかったのは幸運であつたかもしれない。

「で、これが空気を切り裂く蹴りを放つ“嵐脚”だよ」

黄猿は一度高く跳び上がると、その脚から青い衝撃波を伴った蹴りを放った。

その一陣の鎌鼬は高い音を出しながらビルを撫でる様に通り返け、そのコンクリートで造られたであろう建造物を切断する。

特に黄猿の“嵐脚”は海軍随一の威力を誇っており、これに自身の光の能力を合わせれば一瞬で艦隊一つをスライス出来るのだ。

能力抜きでもその速度と鋭さは異常で、居合の刃を上回る速さとも謳われている程であつた。

それを目の当たりにしたなのは達は、開いた口が塞がらない。

「これはわっしの世界ではそこその人間が修めている武術だから、今やったのもそんなに珍しくはないんだけどねエ」

再び、口をあんぐりと開けた。

あの人外武術を使える人間が、黄猿の世界ではまだまだ沢山いるという事である。

恐らく真面にやりあったら、並みの魔導師だとアッサリ黄猿に負けてしまうのではないのだろうかと思った。

「つ、お強いんですね」

ティアナは真つ二つに斬れたビルを横目に見ながら、冷や汗を流す。

魔法を一切使わずに行っただとは、到底思えないからだ。

これは魔法文化の世界であつたら、当然の事なのかもしれない。

しかし、この程度なら黄猿の世界ではほぼ日常茶飯事に近い事なので、別段気にした様子は無い。

「まあ、わっしも海軍本部最高戦力と言われた男だからねエ。
なかなかのものだったでしょオ？」

じゃ、お腹空いたから一旦戻るねエ……間延びした声を残しながら、黄猿は六課の隊舎へと消えて行った。

「最高戦力……って、あの人言っただよね？」

スバルは隣のティアナを見る。

彼女は、首をカクカクと上下に振った。

「最高って、一番って事ですよね？」

キャラの呟きに、エリオは頷く。

つまり、黄猿は彼の世界では最高峰の戦闘能力を持った人間。

「……うっそ……！！！！」

フォワード達はそんな大声を上げ、それに隠れてなのは達は神妙な顔つきをする。

「成るほど、最高戦力か。」

確かにあの技量は只者じゃないと思ってたけど、そこまでの人なんだね。

でも……」

なのははシグナムへ顔を向けた。

彼女は眼を鋭くし、念話をなのはに向けた。

『高町、やはりお前も気付いていたか』

シグナムの脳裏に浮かぶのは、相手に魔力的ダメージを与えるだけである筈の非殺傷設定にしていたレヴァンティンが貫いた、黄猿の身体。

そして、それに対して何ら手ごたえのなかった自分の手。

『当たり前ですよ。あんなにあからさまにやられちゃあ……ね。でも、黄猿さんは“しまった”って顔してたね』

『ああ、まるで普段から使い慣れている力を反射的に使ってしまったようだったな』

なのはもはやてから黄猿から出た変わった反応について聞いていたので、その点を見極めようと思ったのだが……。

録画した映像を解析にかけてみても、魔力的なものやそういった類の反応は一切検出されなかった。

『データは一個を除いて、全部空振り』

空中に浮かぶディスプレイには、レヴァンティンが黄猿に突き刺さるシーンが流れていた。

なのははお手上げといわんばかりに首を左右に振り、スバル達に訓練を終えてお昼休みにしようと言った。

シグナムは画面上に一つだけ反応を示すサインを出しているアイコンを見た。

『光感知センサーか……』

もしかして、身体を光に変えたのか……』

そう考え、シグナムはなのはと同じく頭を左右に振った。

『光人間……フツ、まさかな。』

私としたことが、少しヴィータの勧めるSF映画を観すぎたか』

ありえない事だ。

自分の仮説をすぐに破棄し、彼女も空腹となった胃袋を満たすために食堂へと向かう。

空は青く、陽光がシグナムの桃色の髪を輝かせた。

その光は訓練場から出ようとしていた黄猿のサングラスに映り、彼は口元を軽く緩めた。

「光は素晴らしいよねエ。」

こうやって、誰の目にも一番速く届くんだから」

シグナムの仮説が奇しくも正しいことを、そして彼の能力の異常を知る事となるのはそう遠くない事なのである。

グウ……。

そんな風に少し格好をつけたが、情けなく黄猿のお腹の虫が食料を要求した。腹の中をデモ行進しているのだろうか。

まるで、不遇を訴える者のように腹が再びグウと鳴った。

「流石のわつしでも、光を食べる事は出来ないからねエ。」

あア、お腹空いた」

コートを翻し、正義の二文字を背負った閃光の大将はゆったりとした足取りで食堂へと向かって行った。

第五話、烈火と悪魔の光、（後書き）

次回、特別局員、黄猿さん

第六話く特別局員、黄猿さんく（前書き）

スーパ一久々更新ですね、皆さんどうもすみませんでした。

第六話　特別局員、黄猿さん

異世界でも太陽は東から昇り、その光を受けた海はキラキラと輝く。海軍本部大將黄猿が何とか特別局員として採用されて、既に五日が過ぎた。

先日の実技テストはシグナムとの模擬戦の映像を上層部に見せたら、一応の許可を貰えたのだった。

異世界出身であろうとも一軍の大將が二等陸佐が長の部署で働くのはどうかという意見もあったが、本人が構わないと言っているのに加え、魔力を使わないのに戦闘面ではかなり有能であるので、元の世界に帰すまで戦力として扱き使おうという思惑が地上本部に浮き上がったらしい。

機動六課は一応地上本部に所属している部署であるので、黄猿は一応地上本部所属の民間協力者という事になる。

その地上本部は現在深刻な人材不足で、魔導師の質ははっきり言って犯罪者や民間の格闘家達の方が高いくらいだ。

なので例え魔法が使えなくとも、その人材不足を僅かにでも補う戦力があれば、地上本部は喜んでそれを受け入れる方針を決めたのだった。

そんな諸々の理由で管理局に雇われた黄猿。

ちなみに筆記のテストは徹夜の詰め込みで、何とか合格点以上を取れたらしいが。

雇われた時点での黄猿の評価は完全な力バカの戦闘要員である。

夜明けの少し後、六課から与えられた士官用の部屋にて。

スバル達や官位の低い局員が寝ている部屋は大概が二人部屋だが、異世界といえども大将の位に就く者にそんな部屋で寝泊まりさせる事は色々と問題があるので、なのはやはやて達が寝ている様な士官用の個室が黄猿へと与えられた。

そしてこの広々とした部屋の主となった黄猿は、堂々とキングサイズのベッドで眠っていた。

実際長身にも程がある彼を一般の部屋に入れたら狭くて適わないので、これはこれで良かったであろう。

ただなのはとフェイトが二人で寝ても十分にスペースが余る筈のキングサイズベッドでも、黄猿からしてみれば少し小さめだ。

現に一人で寝ている黄猿のベッドには余るスペースなど、殆ど無かった。

「ふわぁ……朝だねエ」

朝陽を受けて目覚めた黄猿は垂れ目を擦り、寝るときに外したサングラスを掛ける。

眠りから現実世界に帰投してすぐであるが、黄猿は既に完全に目覚めていた。

手身近の机に置いたサングラスに伸びる手は、目標を見誤らずに捉えた。

そして両手でサングラスを丁寧を持ち、スツと鼻に掛けた。

「今日もバッチリだねエ」

このサングラスは黄猿の持ち物の中でも、スーツに並ぶ高級品である。

中年の大將の給料の使い道が、妻や恋人の為でなく自分の娯楽の為にしかないという現実は悲しいものであるが。

黄猿は何度かサングラスの位置を調節し、数回瞬きをした。

これは中將時代に掛けていなかったが、金の使い道がどうだの言っても、今ではお気に入りのアイテムだ。

自分の能力により、壊れる心配も殆ど無い。

今掛けているサングラスは一番最初に買った、そして一番気に入っているタイプだ。

ナス型の薄い茶色のレンズに反射する自分の能力の光が好きなのだ。フレームは金色で、初めてこれを掛けた時に知り合いから「あんたはヤクザか」と言われたが、お気に入りなのは変わり無かった。

サングラスを掛け終えた黄猿は立ち上がり、おもむろに窓辺に向かう。

「……やっぱり夢じゃないんだねエ」

最近の黄猿の日課は、毎朝起きてから窓の向こう側を見る事だ。

窓の外には青い海とその向こうに立つ高層建築物が見える。

それを眺める度に異世界に来たのだと打ちのめされ、同時に夢でなかったのだと思うのだ。

窓の外を数秒眺めた後、黄猿は普段着の黄色いスーツを纏い、白い正義のコートを羽織った。

その他の身支度も済ませ、若干の空腹を感じながら室外へと向かう。

「まア、今日も頑張りますかねエ」

溜息交じりに、口からそう吐き出した。

最近の黄猿のお仕事は、殆どが地上本部からの依頼だ。

何せ機動六課のお仕事は全てなのは達がやっているの、黄猿自身の仕事は偶に来る書類仕事程度である。

なので黄猿は管理局に雇われてから、このミッドチルダの街に蔓延る悪の組織を追い回したり、ロストロギアの密売やら麻薬の密売の現場を押さえに行ったりしているのだ。

そういつた輩は大概質量兵器で武装しているが、黄猿は得意の人外体術で全員をボッコボコにしているのである。

正直な話、物足りない。

今の所、敵も味方も弱過ぎる。

シグナムの様な上級魔導師を相手にする機会を殆ど得ていないので、黄猿としてはこの世界の魔導師とやらの戦力が正確に把握できてはいないのだ。

精々把握しているのは地上本部の戦力が冗談抜きで脆弱な事と、自分の世界よりも遥かに進んだ質量兵器の事ぐらいだろうか。

なので黄猿はまだ自身の能力を使う場面には遭遇していないが、いずれは来るのだろうかと不安と期待の混じった気持ちで毎日を過ごしているのであった。

「あ！黄猿さん！

お早うございます！！」

自室の外に出た途端、元気の良い挨拶が彼の足元で響いた。

黄猿は視線を落とす。

そこには、機動六課の前線メンバーの一人であるスバル・ナカジマ二等陸士がニコニコ笑みを浮かべながら立っていた。

「おう、スバル君。

お早う。今日も元気だねエ」

黄猿は笑みを浮かべながら挨拶を返したが、正直この青髪の少女の事を快活と認定するか馬鹿と認定するか内心迷っていた。

そんな事とは露知らず、スバルは更に笑みを深くしながら敬礼をし、仲間の声のする方向へ走っていく。

訓練の時間だろうか、それとも書類仕事の時間だろうか。

黄猿は彼女の後ろ姿を眺めながら、コートを翻した。

黄猿の今日のお仕事は、麻薬取引現場の押えの手伝いである。

携帯端末を小首を傾げながら開き、「あれエ？」と操作しながら時間を確認する。

電伝虫すらともに仕えない彼が最新の携帯端末を使いこなすなんて無理な話だが、時計と情報の確認くらいは何とか出来る様になっていた。

ディスプレイに映る時間を確認し、足早に食堂に向かった黄猿は食堂を仕切る料理人に頼んで軽食のサンドイッチを早急に作ってもらった。

貰ったその場でモグモグと一口でそのサンドイッチを頬張り、料理

人に礼を言った事と挨拶以外は特に誰とも話さずに仕事へと向かった。

白いコートをなびかせて、軽やかな足取りで出口へと歩き続ける。

何人か六課の隊員とも擦れ違ったが、愛想の良い笑みを浮かべて挨拶するに止めていた。

「やっぱり退屈だねエ」。

わっしが本気になる日はくるのかねエ」

取引場所であつた廃屋で気絶した麻薬組織のリーダーの頭を掴み、黄猿は退屈そうに呟いていた。

「大将閣下、お疲れ様です！

今日もご協力、ありがとうございました！」

そう言つて敬礼したのは、麻薬対策の隊員であるグロス・ブライトマン陸曹だ。

三十代前半の彼は、二十代の若さと四十代の熟練さの中間地点にいる。

これから人間性が試される時期だろう。

魔導師としての実力はイマイチらしいが、正義を番人たる戦士とし

ての黄猿の評価は割と高いくらいだった。

覚悟もあるし、人間的にも精神的にも鍛えられている。

黄猿はこの世界に来てから六課の人間を含めて殆どの他人に気を許していないが、彼は気を許した数少ない人間の一人だ。

「そつちもお疲れエ。

今日も大捕り物だったねエ？」

「ええ、最近は若い連中も積極的に売買に参加してますからね。挙げるのはいいんですが、数が多くて」

黄猿が協力した今回の逮捕劇も無事に終了し、獲物であった容疑者も全員確保した。

黄猿の手の中で力無く気絶している男は本名不明、出身不明の四十代の中年である。

通称は“ニツク”だが、意味は分からない。

こうした通り名や通称や愛称しか知られていない身元不明の悪人は次元世界ではそう珍しくもなく、管理局は彼らの身元調査も仕事の一環なのである。

と言っても、大概はどこかの管理内世界でヘマをやらかした悪党が、逃れ続けてミッドチルダに流れ着いた事例が多いらしいが。

黄猿が倒した男もその事例に当てはまるのだろう。

黄猿は頭から血を流すニツクを、ゴミみたく地面に落とした。

コンクリートに頭をぶつけて小さく呻き声を出したが、特に気に留めなかった。

「ま、用があつたらまた呼んでよォー。
いつでも応援に来るからさァー」

黄猿は欠伸をしながら、踵を返す。

その背中にグロスは声を掛けた。

「それじゃあ、今度は一緒に飲みに行きませんか？大将閣下？」

黄猿の足が止まった。

“閣下”。この敬称に、少しだけ黄猿は苦笑いを浮かべた。

元の世界では“大将閣下”という呼ばれ方は滅多にされないの
で、若干気恥ずかしさを感じるのだ。

この“閣下”という敬称は大将等の将官に付けるのが正しいので
あるが、海軍では全く使用されない敬称である。

大概の海兵は“黄猿さん”や“大将黄猿”と呼ぶので、何だか“閣
下”と改めて呼ばれると違和感を感じた。

「あッ、不都合でしたら結構ですので……」

その表情を不愉快さの表れと取ったのか、グロスは慌てた様子で謝

罪の言葉と訂正を口に出した。

黄猿は更に苦笑を深くしながら、身長差のある彼を見下ろして言った。

「いやァ。不都合ではないけどねェ……ただ、酒を飲みかわす相手に“閣下”はないんじゃないのかなァ？」

そりゃあ仕事中和プライベートは分けてもらいたいけどねェ、酒のお誘いに敬称はいらないと思うよォ」

キョトンとした顔になるグロス。

しかし、すぐに黄猿の言葉の真意を悟る。

「それでは……ボルサリーノさんでは……」

オズオズと口を開いた。

まだ二十代の若さがその動作に見受けられ、新卒の兵士の様に初々しく見える。

「まァ、君とわっしの年齢を考えればそれが妥当だねェ」

黄猿は手で自分の笑う口元を誤魔化しながら、そう答えた。

「そうですか！それでは、またいずれお暇な時に端末に連絡を入れますね！」

グロスは黄猿の通信端末に自分の連絡先を送信する。

「これで、君と通信が出来るのかい？」

その操作を全てグロスにやってもらった黄猿は、返してもらった端末の画面を眺めながら不安そうに呟いた。

「はい、大丈夫ですよ。

この端末はとても扱いやすいタイプですので、誰でも操作出来ますよ」

それが不安の種なのであるが、「誰でも操作出来ますよ」とまで言われて「操作出来ないよオ」というのは格好悪い。

体裁を気にする立場で無いのだが、結局黄猿は敬礼をして帰るグロスを見送る事しか出来なかった。

小さく手を振りながら、遠くに消える麻薬対策課の車両のライトを見つめる。

それらが見えなくなった後、溜息を吐く。

六課に帰って今回の捜査の書類を書いたら、また携帯端末の取扱説明書と格闘しなければならない。

黄猿は現場にまだ残る局員に挨拶をし、スタスタと六課まで歩いて帰った。

基本的に黄猿の移動手段は徒歩である。

本人が歩く事が好きであると言っているが、実際は黄猿の乗れる移動機械が全く無いからだ。

身長が三メートルを超して体格も筋肉質で逞しい彼を乗せれる車は無く、かと言って黄猿は魔法を使って飛ぶ事も出来ない。

実際にはどんな魔導師よりも速く動けるのだが、自分の能力を使う事が何を示すのかをまだ計り切れていない彼は能力の使用を渋っていたのだ。

なので黄猿はミッドチルダの街を眺めながら、羽織ったコートを淀んだビル風になびかせながら海辺の機動六課へと帰還するのである。

黄猿はその長身さと独特な黄色の服装で街の人々の視線を惹き付けて止まないのだが、彼自身は自分に向けられる好奇心に満ちた視線を不愉快に思いながらも、そこまで気にしてはいなかった。

それよりも自分の世界に無い面白い品物を見つけるのに意識を集中していた。

“ジドウハンバイキ”や“クルマ”に巨大な“ビル”、黄猿の好奇心を刺激する物ばかりだ。

それらを眺めながら、自分の世界に帰った時に使えそうな文化や機械を探しているのである。

黄猿とて、ただ時空管理局に協力して利用されて帰るわけではない。帰る時にはこちらの技術を幾つか盗めたらな、と希望的な観測を持っていた。

ミッドチルダの文明は自分達の世界よりも、遙かに高度に発達して

いる。

この事実を認めない程、黄猿は現実を直視出来ない人間ではなかった。

もしこの世界の技術を何か持ち帰れたら、海軍が開発中の“パシフィスタ（平和主義者）”の性能と完成度が更に上がるかもしれない。特に気になるのがデバイスの技術だが、これについてはまだノートツチであった。

一応六課の技術担当官であるシャーリーという眼鏡の女性と交流は持っていたが、流石に異世界人に「はい、どうぞ」と渡せる技術でない事は承知している。

このシャーリーは自分の事を気の良いおじさんとして見ている事を黄猿は分かっていたので、いずれはデバイスについて聞き出せたりデータを貸してもらえたりするかもしれないが、まだまだ先の事である。

黄猿は昼時を少し過ぎて、昼食を終えて職場に戻る人々の間を縫いながら歩き続けた。

先程海軍の機密事項に該当する兵器の名を頭に浮かべた黄猿は、脳裏にとある人物の姿が浮かんでいた。

“平和主義者”か、と黄猿は小さく呟いた。

天才ベガパンク謹製の機械人間である“平和主義者”は元々彼の発案ではなかった。

黄猿の頭の中に浮かぶ男が“平和主義者理論”を構想した。

それは海軍の戦力増強の為に提案された、画期的な理論であった。

初期の“平和主義者”は完全なる機械だった。

しかし、その男は理論を提唱したが形に出来なかった。

その代わりにベガパンクが生身の肉体を素体にした改造人間である
“平和主義者”を造り上げた。

それに男は焦った。自分の理論が、天才ベガパンクといえども他人
の手柄になるのが嫌だったのだ。

そして追い詰められた男はとんでもない間違いを犯した。それで死
んだ、いや、自分が殺したと言った方が適当だろうか。

「俺は負けない。

お前にも、世界にも」

ふと、黄猿の頭にその言葉が蘇った。

この言葉は、その男を殺した時に聞いた最期の言葉だった。

その男とは友人だったのだが、狂気の果てに身も心も変わってしまった
彼が海に沈むのを眺めながら黄猿は決心した。

道を誤る前の彼の為に“平和主義者”研究に協力するのだ、と。

そして黄猿の協力もあつてか、現在の“平和主義者”達は賞金額が数千万ベリーの海賊達の戦闘力にも引けを取らない程になった。

この世界の技術を持ち帰ればどれだけ強くなるのだろうか。

運良く、未だ黄猿の本質に気付いている人物はこの世界には皆無である。

殆どの関係者が、黄猿は気の良い中年將軍で部下から好かれるタイプの将官であると見ていた。

この見方はあながち間違いではないのだが、彼の本質は気の良い中年ではない。

彼は戦士だ。

自分の使命は人畜無害な人々を守り、それを脅かす存在を打倒する事だと常々思っていた。

当然人畜無害な人々に手は出さないし、彼らを守るならば相手の命を奪い、自分の命を彼らの盾にする覚悟で毎日生きていた。

打倒すべき奴らは海賊でもあつたし山賊でもあつたし、不正に溺れた同胞でもあつた。

黄猿は常に奴らと戦い続ける為に、奴らと対決するその日の為に今までの人生とこれからの毎日を捧げて準備している一人の戦士だ。

これまでの海兵生活で何度も勝利し、何度も負けた戦士だ。

黄猿はその本質を隠しながら、常々生きていた。

それはこの世界でも変わらないのだろう。

黄猿は正義のコートを揺らしながら、とてもゆったりとした足取りでしばらくの住処である機動六課へと帰還した。

第六話、特別局員、黄猿さん（後書き）

次回、黄猿の休日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4366q/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～閃光の黄猿～

2011年8月22日00時36分発行